

エペソ人への手紙1章15-23節 「靈的豊かさを知る祈り」

1A パウロの祈り 15-19

1B エペソの人々への感謝 15-16

2B 神の栄光と偉大さの啓示 17-19

2A かしらとされたキリスト 20-23

1B すべての名の上に置かれた方 20-21

2B キリストが与えられた教会 22-23

本文

エペソ人への手紙1章を開いてください、私たちは前回、前半部分 1 節から 14 節までを読みましたが、これから 15 節以降を見ていきます。私たちは前回、エペソという町がいかに豊かで、繁栄しているかについて学びました。その中で、彼らは必ずしも豊かな生活をしているわけではありません。むしろ、困難であったことでしょう。周りは偶像礼拝があり、皇帝礼拝もありました。皇帝礼拝を拒むものなら、市場で売り買いができなくなるような状況も考えられます。そして手紙を書いているパウロ自身が、今、ローマで鎖につながれて、囚人の身です。それでも、彼らはイエス様に対して忠実でした。パウロは、「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ」という言葉から、手紙を始めています(1:1)。

そのようなエペソにいる聖徒たちを励ますために、パウロは、彼らがキリストにあつていかに豊かにされているかを語り始めたのです。それは、物質的な豊かさではありません。靈的な豊かさです。そして地上のものではなく、天上にある豊かさです。けれども、必ずキリストにあつてこの地上に実現するところの豊かさです。私たちは、この神の国に入り、また受け継ぐように召されていて、その望みによって生きています。

1A パウロの祈り 15-19

そして 15 節から、パウロが彼らのために祈りはじめるのです。これまで、神をほめたたえていました。父なる神、子なるキリスト、聖霊と、三位一体の神をほめたたえていました。3 節から 14 節まで、一気に彼は、ほめたたえていました。ギリシア語では一文になっているのです。そして、驚くことに、パウロはこれから祈りを献げますが、これもまた一文なのです。15 節から最後、23 節まで、ギリシア語では一部になっています。これもまた、彼が、彼らのことを祈りはじめたら、止まらなくなったということを教えてくれています。

1B エペソの人々への感謝 15-16

¹⁵ こういうわけで私も、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛を聞いて

いるので、¹⁶ 祈るときには、あなたがたのことを思い、絶えず感謝しています。

先にお話したように、パウロは、エペソの人々の忠実さを聞いていました。主に対して忠実に生きていました。その中身が、ここに書いてある通りです。「主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛」であります。この二つの言葉が一つになっていることが、とても大切です。主イエスに対する信仰が、ローマで鎖につながれているパウロにも伝わっていました。彼らは、主に対する信仰を捨てていませんでした。それだけでなく、いや、その信仰があるからこそ、「すべての聖徒に対する愛」があったのです。

主イエスを信じているならば、そこから愛が溢れるはずですが、パウロが、ガラテヤ書で「キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」と教えました(5:6)。イエス様を信じるということは、すでにこの方の愛を知って、それで信じています。この方が愛しておられて、この方を受け入れているので、それでその愛が溢れるようになるのです。イエス様は、律法は、二つの戒めに要約されると言われて、神を、心を尽くして、思いを尽くして、力を尽くして愛しなさいという命令と、自分自身のように隣人を愛しなさいという命令であると言われました。そしてイエス様は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と命じておられました(ヨハネ 14:34)。

そして、「すべての聖徒」と言っていますね。分け隔てして、自分の気に入っている人たちだけを愛しているわけではありません。神に対して聖め別たれた人であれば、すべて、神によって生まれた子どもであり、また同じ、キリストのからだに属しているということで、その人を愛するのです。その人の性格や背景、そういったことは関係ありません。聖徒の間では、キリストにあって一つなのだという確信があります。ただ、主の愛に満たされて、それでその人を愛するのです。そして、その愛するというのは、互いに仕えるというところに現れます。口だけでなく、真実と行いに愛が現れます。

そして、パウロが、このことを聞いて、「祈るときには、あなたがたのことを思い、絶えず感謝しています。」と言っていますね。パウロが、絶えず祈っていたことが分かります。祈りの生活がありました。これはおそらく、いろいろなことをやっている中で、彼らのことを思っていたのでしょう。立ち止まって、ひざまずいて祈ることもしていたでしょうが、思い出しては祈っていたのではないのでしょうか。その中で、彼らの信仰と愛を思って、神への感謝にあふれていたのでしょう。エルサレムの教会で、使徒たちが、給仕をする者たちを七人、選んだ時に、「私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」と言いました(使徒 6:4)。みことばの奉仕だけでなく、祈りを献げていました。みことばを語ることは大事だというのは言うまでもないですが、祈ることが、人々に対して、どれほど貢献をするのか、私自身、思い出さないといけないと思います。祈りがあってこそ、人々は変えられます。それは、主ご自身に願うことであり、主が働かれる扉を開くことだからです。

2B 神の栄光と偉大さの啓示 17-19

¹⁷どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

パウロは、14 節に至るまで、神をほめたたえていました。そして、その賛美は、栄光がほめたたえられています。父なる神について、6 節で「神がその愛する方にあつて私たちに与えてくださった恵みの栄光」とあります。次に、キリストによる贖いについて、12 節で、「前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるようになるためです。」とあります。そして聖霊が、贖いについて保証となってくくださったことについて、14 節で「私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるためです。」とあります。ですから、ここでパウロは、神のことを、「主イエス・キリストの神、栄光の父」と呼んでいるのです。

栄光というのは、元々は重さを表しています。重力の法則を思えば分かり易いです。重力、あるいは引力があるところに、光は集まります。太陽がそれですね。太陽があるから、光があり、あらゆるエネルギーが存在しています。それと同じように、神がおられるから、すべてが成り立っており、神にすべての注目が集まるのです。それが栄光の父と呼ばれている所以です。

そして、パウロは「父」という言葉を、エペソ書では強調しています。3 章 14-15 節で、彼のもう一つの祈りがありますが、「こういうわけで、私は膝をかがめて、天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」と言っています。父として、神は何をして下さっているのでしょうか？

一つ目に、すべての初めになつておられることです。ご計画を立てるのも、贖いを御子にあつて実行されているのも、そして聖霊を遣わされるのも、御父が率先して行われていることです。父としてしてはいけないことは、家族において、リーダーシップを発揮していないことです。家のことをほったらかしにして、何か問題が起こっても表面的なことしか対処しないことです。

二つ目に、その計画を立て、実行されるにあつて、知恵と思慮を用いておられます。計画しても、そこに実効性がなければ意味がありません。1 章 8 節に「この恵みを、あらゆる知恵と思慮をもつて私たちの上にあふれさせ」とありますね。巨額の富を父が子に受け継がせる時に、単純に、息子の口座にその金を送金したら、息子は放蕩の限りを尽くして、彼を滅ぼすことになるでしょう。ですから、知恵が父には付き物です。

三つ目に、父はこよなく愛しておられます。御子を愛し、キリストにあつて私たち信じる者たちをこよなく愛しておられます。その愛によって、私たちを養い、導き、守ります。聖霊を与えられているのは、確かに贖いが完成する時まで、保証として与えて下さり、私たちを守っておられるのです。

そして知っていただきたいのは、その愛に駆り立てられて、権威と力に満ちているということです。父が権威をふるうのは、愛している者たちを守るためです。敵から守るためです。自分のために権威と力をふるうではありません。父が、自分のために、愛し守るべき人たちに力をふるうことほど、愚かなことはありません。それは父ではなく、男でもなく、臆病者であり、能無しです。本当の男、本当の父は、愛し、守るべき人が痛めつけられたら、その者を容赦なく痛めつけ、守ります。イスラエルの神、父なる神は、それゆえ、ご自分の民を滅ぼそうとしたエジプトのファラオを、紅海においてその軍と共に滅ぼされたのです。

そしてパウロの祈りは、「[神を知るための](#)」といって、その神を知ることができるように、というものです。私たちの最も大きな問題は、神を知らないことです。今、話したような、知恵に満ちた、愛してやまない父としての神を知らないということです。神を信じているといっても、どの神を信じているのでしょうか？何か自分を縛っていて、自分が失敗するたびに重箱の隅をつつくように、しかって、なじるような神ですか？それが神であれば、聖書の神ではないことは確かです。だから、ただ神を信じているとか言っても、それでは足りないのです。神を知る必要があります、それをパウロは祈りにしています。

そして、神を知るためには、「[知恵と啓示の御霊](#)」が必要であることを教えています。聖霊のお働きについて、パウロは 13-14 節で教えていました。御霊が、私たちが贖われて、神のものとなるまでの保証になっています。その御霊は、神を知るために働いてくださいます。私たちは、自分の生まれつきの知性や感情では、神を知ることができません。今でも思い出しますが、母が、息子のことを知ろうとして、一生懸命、神を知ろうとします。思いの中で念じて、神が見えるようにしようとしても、全然、分かりません。そうです、神の御霊によらなければ、神を知ることができないからです。それは、すでに信じている人々も同じです。御霊によって、初めて父なる神を知ります。

そして御霊が、「[知恵と啓示の御霊](#)」と呼ばれています。「[知恵](#)」は、すでに知識として知っていても、それが血となり肉となるために必要なものです。私たちは神を知識として知っていたとしても、生活のあらゆることに、その知識がどのように生かされるかは知恵を必要としているのです。そして、「[啓示](#)」であります、これは神が示されることです。私たちはそれを受け入れるのです。神を知るとは、神が示されることによって知ることができます。私たちが神を知ろうとする時に、単に知性を働かせて把握しようとするだけではだめです。むしろ、主に聞き、主が示してくださることを期待して、それで与えられていく知識です。

¹⁸ また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、¹⁹ また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。

知恵と啓示の御霊によって、まず、「心の目がはっきり見えるよう」になります。午前礼拝で説教したように、私たちが肉眼で見えている世界は、世界の一部にしか過ぎません。見えていないことは、信仰によって確信して、心の目で見えています。けれども、それが存在しないということではなく、事実、確かに存在しており、むしろ物理的な天地は過ぎ去っても、その世界は残っているのです。

三つのことが見えるようになり、知ることができるよう祈っています。一つは、「神の召しにより与えられる望み」であります。神に召されて、私たちにどのような望みがあるのか？ロマ8章では、「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。(30節)」とあります。栄光が与えられたというのは、神の子どもとして、体も贖われて、神のものとなることを意味します。イエス様が戻って来られた時に、私たちの卑しい体を、主の似姿と同じ体に、栄光の姿に変えてくださいます。「ピリピ 3:21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」そして、キリストが地上に栄光をもって現れてくださる時に、私たちのその栄光の姿で現れます。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

そして、二つ目は、「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか」というものです。これは、訳し方によって二つありますが、一つはここに訳されているように、聖徒たちが神の国を受け継ぐというものです。神は、天地を造られて、人を造られ、人に創られた物を支配するように命じられました。それを人が罪を犯したので、悪魔に明け渡されてしまいました。しかし、神は私たちを愛し、ご自分のものに回復した地を、ご自分のものにした者たちに再び受け継がせるようにしてくださいました。神はイスラエルを初めに選ばれて、その残りの者たちに御国を受け継がせます。「ダニ 7:27 国と、主権と、天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』」そして、神の憐れみによって、異邦人もキリストにあってこの御国を受け継がせてくださるのです。

もう一つの訳では、私たち聖徒たち自身が「神の資産」であり、私たちが神のものになることがどれほど栄光に富んだものか、ということです。主が、どうしてそこまで私たちを聖と義に着飾ってくださるのでしょうか！それがすごいことです。エゼキエル書には、イスラエルの民に対してですが、主が、道端に捨てられていた赤子がいて、産まれて捨てられていたので、まだ自分の血もついていた状態のところを主が拾われて、その女の子が成長し、主はこの若い女性と契りを結び、そして彼女を女王にしたという話が書かれています。「16:13 あなたは金や銀で飾られ、亜麻布や絹やあや織物を着て、上等の小麦粉や蜜や油を食べた。こうして、あなたは非常に美しくなり、女王の位に進んだ。」放蕩息子の話も同じですね。ぶたの餌である、いなご豆を食べたいほど空腹であったところで、父の家に帰ったら、そのままの汚い自分を抱擁し、接吻し、そして彼のために、父が祝宴を開きました。彼に指輪をまた履き物を備え、最上の衣を着せました。そして、一家で大祝宴を

開いたのです。どうして、そこまでしてくださるのでしょうか？恵みの豊かさのゆえです。

そして、三つ目は、「神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるか」を知ることです。「大能」とは、神の内にある限りない力です。全能と訳してもよいでしょう。そして「力」とは、その全能のご性質から出てくる力です。その力の「働き」とありますが、働きは、エネルギーの語源となっているギリシア語が使われています。そして、私たち信じる者に働く力とありますが、ここの「力」は、デュナミス、ダイナマイトの語源となっています。天地を造られた全能者の力の働きが、信じる者にすぐれた力として働くということです。これは、私たちが救われる時に、神が働かせてくださった力でもあります。「ロマ 1:16b 福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」

主が、地上を歩まれていた時に、信じる事がどれほど強調されていたか知れませんね。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです」と何度となく言われました。長血をわずらう女が、信じてイエス様の衣に触れたら、血の源がかけられました。イエスご自身も、ご自身が、力が出て行ったことに気づかれました。そして、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました(マルコ 5:34)。このように、主とその全能の力を信じる信仰が私たちに求められます。からし種のほどの信仰があれば、山を動かすことができます。からし種は、非常に小さく、粉の粒みみたいなものです。ですから、信心ではないのです。一生懸命、念じるように信じるのではないのです。全能なる神が山を動かすことができるから、山が動くのです。私たちの信仰そのものにパワーがあるのではありません。神ご自身の力なのです。ですから必要なのは、子どものような、全幅の信頼です。

2A かしらとされたキリスト 20-23

1B すべての名の上に置かれた方 20-21

²⁰ この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、²¹ すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。

ここからパウロは、キリストがどのような力と権威、位を持っておられるのか、そして、キリストのからだである教会は何たるかを説明していきます。その前に、この手紙を受け取って呼んでいるのが、エペソの町に住んでいる信者であることをもう一度、思い出しましょう。エペソの町は、ローマ帝国でも有数の町です。そこには、皇帝礼拝が行われていました。その他の、ギリシアやローマの神々の神殿もありました。魔術もありました。そうした中で、彼らには、ローマ皇帝よりもはるかに高い位におられる方の下にいることを知る必要があります。それから、偶像礼拝や魔術の背後にある、霊的存在よりも、はるかに大きな力と権威を、キリストの御名には与えられていることを知る必要があります。そこに、外側はどんなに圧迫を受けても、内なる人は強められるのです。

19 節で、パウロが話している、神の大能の力ですが、その力をもって、まず、キリストを死者の中からよみがえらしました。主がこの世に来られた時から、すべて神の大能の力が現れました。処女マリアがみごもりましたが、「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」とあります(ルカ 1:35)。そして、主は公の働きを始められて、初めのしるしは、水をぶどう酒に変えるというものでした。群衆にパンを与えられました。レギオンを男から追い出されました。水の上を歩かれました。死にかけている人を癒やされ、またすでに死んだ人を生き返らせました。それでも、パリサイ人は天からのしるしを要求しました。しかし、イエス様は、もうヨナのしるししかないと言われました。それは、魚からヨナが出てきたように、人の子が三日三晩、地の中にいるというものです。これは、死なれて、陰府に降るけれども、三日目によみがえることであります。このようにして、神はご自分の力を、御子を死者の中からよみがえらせることに働かせたのです。

それだけではありません。主は、キリストをもろもろの天を取らせて、ご自分の右の座に着かせたのです。左ではなく、右です。これは、父なる神が全幅の信頼を寄せ、すべてを自分の子に任せる意味を表しています。父のすべてのものを相続する御子の姿です。「詩篇 110:1 主は、私の主に言われた。『あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵を、あなたの足台とするまで。』」敵を足台とする、とありますが、これが、地上においても、また空中にあって、神の敵となっている勢力です。空中の敵というのは、悪魔や悪霊ども、墮落した天使たちです。地上の敵というのは、そうした悪魔と悪霊どもによってそそのかされた、王たちのことであります。彼らは、メギドの集結し、神とキリストに対して戦いを挑みます。ハルマゲドンの戦いです。しかし、再臨のキリストによって、その口から出る剣によって、ことごとく殺されます。

そこで、「すべての支配、権威、権力、主権の上に」とありますね。これらは、目に見えない霊的な勢力です。悪魔や悪霊どものことです。また、そうした霊的な勢力によって、地上の勢力も動いていますから、天と地におけるすべての勢力と言ってもいいでしょう。そのような勢力は、自分の支配を広げるべく、戦いを挑みかかります。けれども、そのような名のすべてのものの上に、イエスの御名を父なる神は置かれたのです。主権者である神が、その絶対的権威によって、イエスをキリストとお定めになったのです。

このことを、非常に人間臭い例えですが、日本人たちに分かり易く説明するために、ドラマ水戸黄門に出てくるセリフを取り上げましょう。「この紋所が目に入らぬか！」であります。「この紋所が目に入らぬか！こちらにおあすかたをだれだところえる。おそれおおくも先の副将軍、水戸光圀公であらせられるのであるぞ。ご老公様の御前である、頭が高ーい。」そして、これまで威張り散らしていた悪党どもが、はは一つと言って、ひれ伏すのです。それまでは、水戸黄門は普通のおじいさんのようにしてふるまっていました。権力を持っている者たちが、悪さをして、水戸黄門に対しても挑みかかります。けれども、その紋所を見た瞬間に、震え上がるんですね。

主イエスは、父なる神ご自身の右の座に着いているという、天と地にある一切の権威が与えられた方なのです。それで、諸々の霊は、どんなに力があるうとも、震えあがってひれ伏します。それだけイエスの名は、大いなる御名にされたのです。ですから、まずはイエス様は、弟子たちに、ご自身の名によって祈れば、主権者であられる神は何でも祈りを聞いてくださると励ましてくださいました。ご自身の名によれば、全権が与えられているのですから、父は何でも言うことを聞いてくださるのです。その喜びの約束を、イエス様は弟子たちにくださいました。「ヨハ 16:23-24 その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。24 今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことがありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。」

そして、世に対して、イエスの御名を宣言します。ペテロとヨハネが、宮に入って祈りに行こうとしている時に、施しを求めている足なえの男がいました。そこでペテロが言いました、「使徒 3:6 金銀は私たちにはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そうしたら立ち上がったのです！そして、多くの人が集まってきました。でも、ペテロは、自分やヨハネに力があるとか、敬虔であるとか、そんなではない。「3:16 このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。」と言っているのです。ペテロとヨハネは、捕らえられてサンヘドリンの前で証言しなければならない時も、キリストの御名を大胆に宣べ伝えました。「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」イエスの御名に、すべてのものを従わせる力があるのです。

この時に気を付けなければいけないのは、主は、私たちの弱さにその力を現すということです。「Ⅱコリ 12:9 わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」今、パウロはローマで鎖につながれています。イエスの御名によって、その鎖が外れることもあるでしょう。事実、ペテロが牢屋に入れられている時に、御使いが来てそれを外しました。パウロとシラスも、ピリピの牢にいた時に、地震が起こって、鎖が外れました。けれども、ローマにいる時は鎖は外れなかったのです。しかし、それでもその状況にあって、なおのこと強められたのです。肉体、また物理的な制約が課せられている中で、それであってもみこころを行う力が与えられる、それが弱さの中のキリストの力です。

それから、「また、今の世だけでなく、次に来る世においても」と言っていますね。力や権勢と呼ばれるものは、強くなれば弱くなる。起こっては過ぎ去る、一時的なものです。今の世で力を誇っていても、次の世では無力です。けれども、そんなものではないのです。死をも滅ぼされた方は、今の世のみならず、次の来る世においても、そこでもイエスの御名が、すべての名にまさっているようにしてくださいました。

2B キリストが与えられた教会 22-23

²² また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。

パウロは、神がすべてのものをキリストの足の下に従わせる、という全権を与えられました。そして、すごいことを神は行われました。教会に、この方を贈り物としてくださったということです。教会というのは、ギリシア語ではエクレシア、「ある目的をもって呼び出された会衆」というのが元々の意味です。主に召し出された者たちです。

どのような目的があるのか？キリストが、教会にとって「すべてのものの上に立つかしら」なのだ、ということです。ここのすべてのもの、とは、教会内のことでは、もちろんありません。天地にあるもの、今だけでなく、後の世にもあるもの、すべてであります。その上にキリストが立っておられて、この方が教会のかしらなのです。このようなキリストから召し出されて、私たちは集まっています。ですから、世の対する証しなのです。世に対する光なのです。ですから、私たちが、内側で争っている暇はありません。世から選り別たれ、召し出されて、集まっていますから、世に対して、すべてのものの上にキリストがおられることを証しするのです。

私たちカルバリーチャペルは、東日本大震災の時にある東北の地域に行き、復興支援活動をしていました。当時は、まだ役所の方々は、私たちが宗教団体であっても、得られる援助はすべて得るという感じが残っていて、なんとか、公の施設の広い駐車場を使って、夏祭りを開催することができました。ハワイアン・ダンスを披露し、かき氷を用意し、空気を入れて大きくふくらまして、中で子供たちが遊ぶことのできるものまで用意できました。そこで、大胆にも福音を語ることが出来ました。これは、公のイベントですから、何と、職員の方が町に出て行って、宣伝をすることも許してくださったのです。職員の一人が運転し、私が助手席に座り、教会の若い女の子がうぐいす譲りになって、祭りの宣伝をしました。その時に、職員の方が、漏らしていました。それは、この祭りに人々が参加しようにも、なんとその小さな地域の中に、さらに集落があり、ものすごい小さな集落がもう一つの集落に嫉妬をしたり、競争したりするのです。職員さんは、彼らの要望をなるべく聞いて、公平になるべく努力しても、結局、「あなたがたは、あの集落に加担しているでしょ？」と思われて、「ならば、この祭りには参加しない」みたいな、集落も出てきたとのことなのです。

それを聞いて、思いました。もし、日本の教会で、細々したことで争っているのであれば、それはまさに、このような小さな村社会の争いであろうと。まだ、キリストを知らない世界は大海原のように広がっています。そして、キリストは、その大海原のような世に、生きておられます。すべての上におられる方ですから。キリストを知らない人々の上にも、キリストはすでに働いておられるのです。あたかも、そこにはキリストがいないかのようにみなし、教会の中だけにいると思って、教会の中だけでああだこうだ、と言っていることが、教会が立てられている目的を見失っているという

ことができます。

²³ 教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。

パウロは、さらに、教会は「キリストのからだ」だと言っています。キリストという方がおられて、この方がかしらであります。そのからだにまでなったださっているのです。そこまで一つになっておられる、結びついておられるということです。教会から離れてキリストを知ることは、不可能です。もちろん、物理的に、例えば寝たきりであるとか、離れていても、そうです。自分が、キリストに結ばれているものであれば、教会の一部になっているということです。このことの学びは、コリント第一 12 章で行っていましたね。私たちは、キリストのからだの各器官であるということです。

そして、「すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられる」ということが、すごいですね。すべてのものを、すべてのもので満たすというのは、どんなことであっても、その主権者はキリスト、ということです。キリストによって、すべてが成り立っているということです。だから、どんなことがあっても、イエスがおられるということで解決なのです。この方が、すべてのすべてなのです。みなさんはぜひ、大胆になってください。自分の周囲の人々の通っているところには、キリストがおられます。そのキリストを伝えるのです。

そして、そのすべての全てである方が、満ちておられるのが教会です。とてつもなく、途方もないことではありますが、イスラエルに幕屋を造れと命じられた神は、全能者であられ、遍く、どこにでもおられ、すべてのすべてであられる方が、なんと、聖所の中に満ちてくださいました。それと同じです。私たちが召されて、集まっているということだけで、大きな証しになっており、世の光となっています。主が、ご自分を満たすと言われているのですから。